

Madan Nighantu: Kuchila is as good as 'Tedu.' It makes dry and cool.

Dhanwa Nighantu: It soothes. It cures pain of legs.

Vernacular Names

Nepali: Kuchila

Newari: Kuchila

Hindi: Kuchala, Makataindua

Marathi: Kazara

Gujarati: Nerkochala, Nerakchola

English: Nuxvomica, Pine nuts

Bengali: Kuchile

Karnati: Kanjiwar

Tailing: Munsthiginza

Latin: *Strychnos nux-vomica*

Persian: Ifanki

Arabic: Katilulkalkfaluzmahi

It is found in Chunkot Ghat Kyamunetar and villages.

Résumé

This is a hand-written herbal encyclopedia including about 840 excellent colour plates, 750 of plants and 90 of animals, and over one thousand pages of their explanations. It consists of 10 volumes, of which 8 volumes are botanical, 1 zoological and another mineralogical. The whole view of individual plant, from the root to the leaf, the flower and the fruit as well as its environment, are drawn. Explanations, mainly of medicinal usages written in Sanskrit and Newarese, are quoted from various classics. Vernacular names of Nepalese, Newarese, many languages of Indian tribes, Persian and Arabic, and sometimes of Tibetan, English and Latin are mentioned. Habitats or localities of the plants are also noted.

This encyclopedia was compiled by Pandit Ghana Nath Devkota under the instruction of Bir Shumsher Rana and Chandra Shumsher Rana, the prime ministers of Nepal in the end of 19th and the beginning of 20th centuries.

This immense work shows the high level of Nepalese herbal science and is useful as an excellent icones of Nepalese plants as well as a reference book of Ayurvedic science.

○ワスレナグサ類の和名考 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: The Japanese name for the forget-me-not group

ワスレナグサ (勿忘草) という和名は、牧野先生が本誌1巻5号(1913)で指摘されているように、川上瀧弥氏が“はな”(1902)という単行本で、*Myosotis palustris* に与えた名であって、当時すでにこの属名に姫ムラサキという名もあったことが、松

村任三氏の本草辞典 (1892) でわかるが、川上氏は英語名である *Forget-me-not* にもとづき、ワスレナグサと名づけたものようである。もっともこの名は言葉の調子がわるいとかで、ワスレナグサとすべきだと、牧野先生は俳句講座という雑誌第 10 巻 (1933) で述べられ、よくこの修正名を用いておられた。当時、川上氏はどんな立場でこの和名を、この学名のもとに与えたか知る由もないが、とにかく、この和名をこの学名と和名に該当するものに用いたとして、この学名と和名とで図説してある図説類の図を見ると、名実一致しないところがあるようである。更に牧野図鑑の説明記事中に「鉢植や花壇に栽培されている」ということが書いてあるのに気づいて図を見ると、まさにその感が深い。春先にワスレナグサの名で花卉店の店頭にならぶもので、この説明と一致するものがあるが、その学名を *Myosotis scorpioides* L. (= *M. palustris* (L.) Hill) とするわけにはいかない。*M. palustris* すなわち、現在の *M. scorpioides* は水辺の草であるが、牧野図鑑などで見られるものは原野にはえるものである。そもそも、この *Forget-me-not* の伝説の一つは、英国の女流詩人 Bickergill の短詩 *The Bride of Danube* につづられたように、水辺での出来ごとだから、原野の草でなく、水辺に生える草が出てくるのが当然のことで、原野に生えている筈がない。それなら、牧野図鑑などで見なれているものはなんであるかと考えて見ると、あれは *Myosotis arvensis* Hill, つまり英国人が *field-forget-me-not* と呼ぶものか、*M. alpestris* F. W. Schmidt のようなものかと思はれる。

ちなみに言うが、近年時々和名として用いられる、シンワスレナグサのシンは真のことで、米名として用いられている *True-forget-me-not* にとびついでのことだけで、*M. scorpioides* の一名として登場しはじめたものらしい、これも、あれやこれやと思案のあげくできたものらしく、あちらでもやはり、あれこれもめたあげく、こんな名ができるにいったのかもかもしれない。ときに、現在市販されているワスレナグサの多くは、水島正美氏が、その種子から発芽したものを *M. arvensis* Hill と同定して、ノハラムラサキの名で東大資料館の標本に加えている。この名は大井氏が日本植物誌第 1 版 (1953) で命名されたものである。

ところで、牧野標本館に収蔵されている標本によると、牧野先生は 1936 年 5 月、下総成東の原野にてとられたものを *M. arvensis* Hill と考定され、これにノハラワスレナグサの新称を手記されている。これが印刷されていたら、最初の和名ということになる。このことは故松山庫三氏が先生の標本整理中に気づき、その旨標本上に記されている。それはともかく、これらはいづれも牧野図鑑などの図によく似たものであって、*M. scorpioides* (= *M. palustris*)、すなわち、ワスレナグサではない。むしろ牧野先生のノハラワスレナグサにあたるように思われる。私も昨年ワスレナグサとして買った種子をまいたら、本年花が咲いた。これは萼の毛の先端が U ターンしているので、まぎれもない *M. arvensis* Hill である。

(東邦大学薬学部)